苫小牧
老舗洋食店と宇宙ステーション

巖谷　國士 Iwaya　Kunio

1943年東京生まれ。東京大学出身。仏文学者・評論家・作家・写真家・明治学院大学名誉教授。シュルレアリスムの研究と実践を軸に、芸術・文化の広い領域にわたって執筆活動を展開。講演や展覧会監修、内外の紀行でも知られ、北海道との縁も深い。著書に『シュルレアリスムとは何か』『日本の不思議な宿』ほか多数、近著に『澁澤龍彦論コレクション』全５巻。

駅前広場から右へ向うと、大きな２本の煙突が見えてきた。赤白に塗りわけた太めのと白い細めのとがあり、細めのからは灰色の煙がもくもくと出ている。最近ではめずらしい都市風景で、美しいとも凄まじいともいえる。あれが有名な「王子の煙突」だろうか。

苫小牧は北海道を代表する工業都市で、いまは自動車工場や石油コンビナートなどもあるが、1910年に王子製紙の工場ができて以来、とくに製紙の町として発展してきた。戦後には国際貿易港の、また漁港の町としても栄えている。こういう都市はふつう観光地になりにくいものだが、今回はあえて観光客として訪れたので、まず観光案内所を探した。

駅前の「ココトマ」と呼ばれるかわいいビルのなかにそれはあった。小さなカウンターの奥の活潑な女性が、ただひとりの客である私の質問にてきぱきと答える。ステッキをついてよろよろしている老人を見るに見かねたのか、バス乗場まで案内してくれた。

まず「出光カルチャーパーク」というところへ行く。モダンな図書館があり、噴水の先の遊び場に子どもたちの姿が見える。近くの仮設テントには「世界の珍しい万華鏡」とあって、これは見ないわけにいかない。展示台に何十という万華鏡が並び、子どもたちが熱心に覗いている。

色とりどりの円筒、ついで円錐形のが多く、覗いた内部の模様もさまざまだが、なかに金属棒で組みたてた複雑な器械仕掛のもある。万華鏡は1816年にイギリスで発明されたということだが、その原形に近いものかもしれない。

小さな少女があらわれて、その覗き口にへばりついた。複雑な器械をあやつって黙々と見つづけ、長いことそこを離れない。解説係の男性によると彼女は常連で、このところ毎日やってくるらしい。とくにこの器械が好きなのだという。

万華鏡少女とはすばらしい。移りかわる光の模様に魅せられているのだろうが、そのことは彼女の未来にも作用するのではないか。美術系に進むかそれとも理科系か。頼もしく思える。初夏の週末だが、幼い少女がひとりで公園に来て、心ゆくまで万華鏡を覗いているという光景が、この町のおそらく平穏な生活を想像させもした。

没頭する彼女には声をかけず、ほかの万華鏡をいくつか覗いてから、同じ男性とすこし話した。じつは「万華鏡日本伝来200年記念」で、札幌にある「万華鏡ら

苫小牧「出光カルチャーパーク」でひらかれていた万華鏡の展示会で、器械式の万華鏡を覗きこむ少女。　撮影：筆者

ぼ」から出張してきたのだという。

「万華鏡からはアルファ波が出ていましてね。ストレス軽減の効果があるんですよ。」

「それは知らなかった。でも、なぜここに？」

「苫小牧にはカジノ招致の計画がありましてね。アルファ波がカジノ依存症に効きます。万華鏡は実用的なんです。」

これは思いがけない事情だった。国際港があるとはいえ、人口17万強のこの静かな町に賭博場をつくるとは。しかもすでに「依存症」対策まで考えているとは。

「例の統合型リゾート施設ですか？ 苫小牧に似あわないし、万華鏡にはなおさら似あわないな。そもそも需要がないでしょう。」

「でしょうね。カジノは子どもと関係ないし。でも、万華鏡とは関係があるわけで。」

「実用性のない玩具だからこそ万華鏡は不思議で、美しいんですよ。」

「カジノ計画も立ち消えになるでしょうね。」

他愛のない立ち話をしてから、まだいる万華鏡少女と別れ、すぐそこに見えている博物館へ行くことにした。恵まれた自然環境と歴史と生活のありかたからして、こういう都市の博物館ではよい展示品と出会えるにちがいない。

美術博物館で見る歴史と文化

正確には「苫小牧市美術博物館」という現代建築だが、正面に出ている看板に「第一洋食店の100年と苫小牧」とある。じつは当地へ来る前から、ぜひ訪れたいと思っていたレストランなので、この偶然に驚く。それにしても100年を経て展覧会になるほどの由緒のある老舗だとは知らなかった。

入るとまず巨大なハリボテのマンモスの親子が立っている。牙（きば）のない子どもマンモスがへんてこでかわいい。「大地のおいたち」「原野の生物たち」などの展示室を見て２階へあがると、先史時代の原野から現代の都会まで、苫小牧とその周辺の歴史をたどれるようになっている。

縄文やアイヌの文化の資料には貴重なものもある。とくに1966年に沼の端で発掘されたという有形文化財、600年前のアイヌの丸木舟５艘（そう）は見ものだった。３艘は川の舟、２艘は海の舟で、細長い大木の幹を削りぬいた曲面が美しい。

資料はわかりやすく配置されていて、子ども観客への配慮を感じる。エゾシカの剥製とにらめっこする少年や、初期のスケート下駄を見て笑い声をあげる少女もいた。

苫小牧の語源はアイヌ語のト（沼）＋マコマイ（奥に入ってゆく川）だが、1800年に八王子の武士団が開拓で入った北前船の港の勇払（ゆうふつ）から、73年に開拓使出張所を移してきた土地である。王子製紙のできた明治末から昭和にかけて、工業で発展した各時期の資料も多い。その常設部を出て一階の奥へ進むと、以後の歴史を延長するかのような企画展会場がひろがった。

店の創業者・山下十治郎（1884－1945）は山梨の生まれで伊藤姓だったが、山下家の養子になり、長じて当時の日本を代表する西洋式の横浜グランドホテル（1923年の関東大震災で倒壊）に勤め、そこのレストランで修業したとされている。

やがて北海道へわたって札幌の豊平（ほうへい）館の料理人をしてから、1911年に苫小牧に招ばれ、王子製紙の迎賓施設「王子倶楽部」の司厨長となって７年間、本格的なフランス料理を供していた。

退職後すぐ第一洋食店を開業。人口１万6000の小都市でも洋食店を持続できたのは、優れた調理術と王子倶楽部の人脈のおかげだともいう。コース料理のほかにコロッケやカレーライスなどの大衆向けメニューも出していたが、調理具やカトラリーはフランス製のをそろえ、食材や調味料も輸入品を用いていた。

1921年５月の「コイノボリ大火」で店は焼失してしまったが、自分で設計した平屋を再建、25年には二階を増築して堂々たる洋食店に仕上げた。

そこまで、山下十治郎の代だけでも展示品は多く、町の風景と王子製紙関係の写真や絵葉書や地図、皇太子（大正天皇）行啓の資料、家具や調理具や食器、料理帖や出納簿や芳名録まで見られたが、二代目・山下正（1913－2011）の代になると、こんどはがぜん美術

第一洋食店の内部、中央の通路を優雅に歩む三代目店長の夫人。　撮影：筆者

展の様相を呈してくる。

山下正は15歳で調理場に立ち、他の店では修業しなかったために、父のグランドホテル式の料理をそっくり継承したが、他面、生来の趣味人として文学・芸術を好み、稀覯本や蔵書票や絵画の蒐集に没頭したばかりか、土地の文士・芸術家とも交友したので、店は文化サロンの趣を呈するようになった。

実際、この山下正コレクションの作品や贈物や手紙などを通して、戦前・戦後の文化環境も見えてくる。川上澄生や三雲祥之助、原精一、国松登といった画家の作品も、彼らの「王子洋画研究会」の活動ぶりもわかる。とくに疎開先の白老から週末に通ってきたというモダン風俗の画家・川上澄生の作品は数十点におよび、よいものがいくつもあった。

1960年前後には「民藝運動」の芸術家も来訪したらしい。平取でアイヌ文様の調査をした芹澤銈介は山下家に泊まって店のロゴなどをデザインしているし、69年には陶芸家の濱田庄司とバーナード・リーチが訪れている。そういう大家の作品もあるので、展示は思いがけず盛り沢山だった。

建築の資料で惹かれたのは、1953年にまた建てなおされた現在の店の写真で、これは土地の伝説的な大工・浦本親子の仕事だったという。ハイカラ民芸調は各地の古い洋食店と共通しているが、どこか一味ちがう。この店でいよいよ食事をしたくなってきた。

その日は休業と聞いたので、翌日の昼をそこですごすことに決めたのだった。

第一洋食店ですてきな昼食

翌朝は雨模様だったが港へ出て霧にかすむ漁船の群れを眺め、名産ホッキ貝の料理などで人気のある「マルトマ食堂」前の長い行列に一驚してから、1924年に来苫した宮澤賢治の詩碑を見て、そこに近い第一洋食店に到着した。間口のさほど広くない二階家で、切妻部分にハーフティンバー（木組格子）があり、腰には大谷石が積まれている。地味ながら趣のある建物だ。

まず店内を見てまわった。想像していたよりもずっと広く、中央の通路をはさんで両側に別の食堂空間がある。白い天井と壁、濃褐色の木の梁と柱と格子窓、通路の欄干、椅子と食卓。奥に向って左の空間は白いテーブルクロス、右は赤いランチマット。シャンデリアにブラケットにフロアスタンドの照明は淡いオレンジ色で、不粋な蛍光灯などどこにもない。

蒐集品の一部らしい絵や陶器もさりげなく飾られている。正面左の壁の前には古い木製の巨大なスピーカーがあり、オペラのアリアが流れている。いかにも居心地のよい店内である。

入口に近い階段は古式で黒光りしていて、戦前の店のものを残しているらしい。その下にたたずんでいると、品のよい初老の女性があらわれて、二階を案内してくれるという。三代目の現店主・山下明氏の夫人だろう。よろこんであとに従った。

階上には宴会用の和室がいくつかある。柱や窓枠がやはり濃褐色で、一見して重厚な古民家の雰囲気だが、椅子のならぶ部屋もあり、フランス料理も似あいそうだ。いわゆる民芸風とちがって国籍不明というか、あるいはむしろ地方色の薄いところがじつは北海道風なのではないか、と思われた。

いよいよ食事が楽しみになる。一階左奥のテーブルにつき、古びた赤い表紙の献立冊子をひろげると、昼のセットがいくつかある。創業期から継承された料理もふくまれているらしい。「Dコース」を注文した。

まずクリームスープ。おそらく馬鈴薯をベースにしたもので、しみじみ旨い。たしかに古きよきヨコハマを思わせる味がする。

野菜サラダ。少量だがトマトなど新鮮でよい。

小さなコロッケとハンバーグの盛りあわせ。前者は馬鈴薯を入れない戦前の調理法を受けつぐもので、クリームのとろみが西欧の料理クロケット（コロッケの

原型）に近い。後者は昔のメンチボールのようで懐かしい。

デザートに北海道らしいハスカップのアイスクリーム。これがじつに旨かった。甘味と酸味が肉料理のあとにぴったりだ。さらに昔風のコーヒーをとって終了。以上で1890円。

その間、若い女性店員の給仕ぶりが快かったこともつけ加えよう。必要最小限になされる説明が真っ当な日本語で、今風の「～のほうになります」といった意味不明のマニュアル言葉を使わない。質問にも慌てたり緊張したりせず、自然に答えてくれる。そんなことだけでも最近では貴重なのだ。

気分よく店を出て、もうひとつの目的地へ向った。この町では第一洋食店とならんで行きたかったところ、「苫小牧市科学センター」である。

宇宙ステーション「平和」

ここは科学センターといっても子ども向きの施設で、しかも宇宙や航空などを中心にしている。なによりも世界にひとつしかない、旧ソヴィエト連邦の長期滞在型宇宙ステーション「ミール」（ロシア語で平和の意）があることで有名だ。これは見たかった。

旧ソ連は宇宙開発の最先進国として、1971年に初の宇宙ステーションを成功させたが、ミールはそれの第二弾で、86年に打ちあげられて以来15年間も、２～３人の宇宙飛行士を乗せて、地上400キロの空間を時速２万8000キロの高速でまわりつづけ、2001年には落下焼却の末、南太平洋の海底に沈んだものである。

したがってここにあるのは実際に宇宙をめぐったミールではなく、予備につくられたもう一艘だが、造りは寸分の違いもない。1989年に名古屋の世界デザイン博に展示されたあと、オークションを経て苫小牧の建設会社に転売され、98年の苫小牧市政50周年記念に寄贈されたのである。

王子製紙工場の「王子の煙突」。駅前ホテル上階の窓から。
撮影：筆者

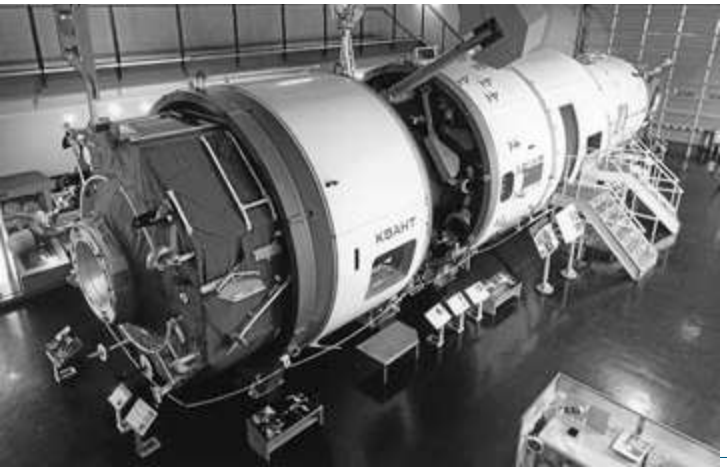
附属のミール展示館に入るとすぐ目の前に勇姿があらわれる。全長19メートル強の円筒形で、巨大な万華鏡のように見えなくもない。後部に「クバント」（量子の意）という天体観測室がドッキングされている。接合部の近くの階段から内部に入ることができた。

なかには少年の先客がひとりいて、操縦室の機器を熱心に観察している。漫画に出てくる「宇宙少年」のようで頼もしい。個室は思ったよりも狭いけれど、生活に必要なものがコンパクトに収まっていた。作業台を兼ねた食卓にはオーヴンや塵（ごみ）入れもついている。洗面所の便器はそれ自体が宇宙船を思わせる奇妙な形だ。無重力だと水が流れないので、一気に吸いとるようになっているらしい。

宇宙食もいろいろ展示されていた。罐詰類が多いがパック入りのボルシチや黒パンもある。1990年にTBSの秋山豊寛氏が短期滞在したときは、たしかカレーライスを持ちこんだとかで、案外ふつうの洋食などもそろっていたのかもしれない。

その他もろもろ、ミール展示室はおもしろかった。宇宙少年のあとについて本館二階の宇宙と科学遊びのコーナーもめぐり、外へ出たときには、ここがもう北海道の苫小牧だとは思えなかった。

それからバスでウトナイ湖まで行って美しい水面を眺め、夕刻にホテルに戻ってくると、上階の窓から「王子の煙突」が望まれ、一幅の絵のような印象が残った。



苫小牧科学センターの「ミール展示室」にある旧ソ連の宇宙ステーション・ミール（ロシア語で平和の意）を二階から見おろしたところ。奥には観測室・クバント（量子の意）がドッキングされている。　撮影：筆者